

立身出世主義の論理と機能

竹内 洋(関西大学)

立身出世観念が普及、確立し相対的に固定した明治後半期、大正前半期と時代的レファレントにして立身出世主義の論理構造を考察してみたい。

わが国の立身出世主義は、(1)立身出世を非常にコンパルシヴに動機づけたこと、(2)にもむらわらず逸脱者や失意の大群を抑止する論理を含み、(3)立身出世の機会の閉塞にもむらわらず立身出世熱が保温されたことに特徴がある。(1)の論理が<成敗的立身出世主義>であり、(2)の論理が<ダブル・イメージ的立身出世主義>であり、(3)の論理が<ささやか立身出世主義>である。

立身出世の機会は万人に開かれており、奮闘努力だけが「成敗を決定する」という考えから、不成功は個人帰責となつたが、そのぶんだけ成功(出世)はコンパルシヴに動機づけられる。作田啓一は、「天皇への距離という価値規準の一元性」、成功や失敗が「がれの家族の成功や失敗」となることに、日本の出世主義の強迫的性格の源泉を丹念に「立身出世」が、その他に(それゆえにでもあるが)日本社会では成功と不成功は「成敗」といわれ、不成功は敗北という形で特に強く意識された<成敗的立身出世主義>であったことに注目したい。ちなみに success の反対語 failure においては、non-occurrence, non-performance のニューアンスが being defeated にたらまえている。それゆえ、成功(出世)は「人に負けない」(柳田国男「明治大正史：世相篇」)という形で非常にコンパルシヴに動機づけられた。成功した友が「敵」とされる(徳富蘆花「断崖」)のは、立身出世主義が<成敗的>立身出世主義であるからに他ならない。雑誌「成功」(1902年10月～1915年12月)の「記者と読者」欄には、「成功希望生」とともに「煩悶生」がしばしば登場するが、明治後半期、大正前半期の「成功青年」と「煩悶青年」(徳富蘆花「大正の青年と帝国の前途」)

は<成敗的立身出世主義>によって生まれた双頭の青年類型であったといえる。

にもむらわらず<ダブル・イメージ的立身出世主義>が逸脱者や失意の大群を抑止する論理となつた。成功教本は「実際の社会に至りては、最第一に此事(道徳—引用者)の必要なるを知るなり、立身出世を希望する者、決して軽々の観を為すべからず」(村上濁浪「処世者と人格」成功1905年6月)と、世俗的成功(出世)と道徳のパラレリズムを説いたがそのとき世俗的価値と道徳的価値はオーバーラップする(図A)。だが、このようなパラレリズムが強調されざるにせよ「人間は成功すると喜ぶるんだね、喜ぶから成功するんじゃないよ」(佐々木邦「村の成功者」といふ認識を生んだ。そして「其の実に於て人類社会のために盡して居れば仮令埋木の花咲く時はなくとも、其人は真の成功者」(傍点引用者)であると「名譽ある失敗者」(成功、1903年3月)が賞揚される。「藤吉郎主義」から<階梯的立身出世主義>を脱色させた「金次郎主義」(見田宗介)＝「職務に野心を集中する第一等主義」や「清貧イメージ」は、そこからすぐ一步の距離にある。そのようなアングルから庶民にうつた世俗的価値と道徳的価値のシルエットは図Bのようなものではなかつたが、成功(出世)が図Aのようにみえるとき、それは成功(出世)圧力から逸脱行動へむかうことの防止機能をはたし、図Bのようにみえるとき、それは失意の慰撫機能をはたしたといえる。

つぎに、移動距離の短い非エリート内のソフトな上昇移動が出世というコンセプションを獲得した<ささやか立身出世主義>をみよう。<ささやか立身出世主義>の形成基盤は「藤吉郎主義」と、体制の秩序が確立した時点での日本社会の地位・役割システムの性質にある。「藤吉郎主義」には、「職務に野心を集中する第一等主義」(神島二郎)

の他に<階梯的立身出世主義>が含まれている。
 「大隈ですら、其初めは草履取りより昇った……それが一步一步進むに従って其希望は段々と大きくなり……³³職を得て蜀を望むということが総べての成業者の成業の道程である」(大隈重信「現代学生立身法」成功、1906年10月)という一節は「藤吉郎主義」における<階梯的立身出世主義>の側面と雄弁に物語る。たしかに「藤吉郎主義」は「秩序とエネルギー両立させる方途」(見田宗介「立身出世主義」の構造)として支配者層から積極的に宣伝されたが、体制の秩序が確立した明治後半期には「大学卒業の学士が廿五円の司法官を争う時代だ。……役人はらば判任の下役、銀行会社ならは十円か十五円の本業社員といふ次第……矢張り順序を踏んで、龜の甲より年の効、ジリジリと推し上がる他はない」(傍点引用者、高田青年「社説」1903年2月)と、<階梯的立身出世主義>としての「藤吉郎主義」は現実的根拠をもっていたといえる。このような<階梯的立身出世主義>から<ささやか立身出世主義>が生じた。つぎにもうひとつの形成基盤である体制の秩序が確立した日本社会の地位・役割システムについてみよう。地位のラダーが細分化され、役割が上下関係の面から厳密厳格に規定され、客観的に微細な地位の上下差も役割の局面では大きな上下関係となつてしまってくるというのがそれである。官等の差別は公の領域以外の私事の交際、宴会等「格別官等の差別を要せざる時」にも順序すべきとする「単人訓諭」(1878年)や、上官の命令は「朕が命令を承る義はりと心得よ」とする「単人勅諭」(1882年)は、体制の秩序が確立した時点での日本社会の地位・役割システムの性質を先駆けとして示すものである。このような地位・役割システムの社会では、細分化された地位のラダーをひとつ上昇することも心理的には大きな報酬となる。ただし、「上長は天皇として相対的絶対者」(藤田省三「天皇制国家の支配原理」)たりうるからである。かくて非エリート内のソフトな上昇移動も出世というコンセプションを獲得するにいたる。日本社会において「自由観はなによりもまず地位上昇の要求(立

身出世!)として発現」(神島二郎「近代日本の精神構造」)した秘密もここにある(同時にこのような社会は、「今にみよ」との「驚起一番」の<ルサンチマン的立身出世主義>をももたらした)。このような<ささやか立身出世主義>によって立身出世の機会の閉塞にもかかわらず立身出世熱が保温されていった。

最後に<ささやか立身出世主義>(ソフトな立身出世)と並存した<功名的立身出世主義>(ラジカルな立身出世)についてふれよう。立身出世は「身を立て名をなす」「功名富貴」として意識されたが、功名は「くめること」にとまらう prestige だけではなく、「すること」にとまらう esteem も意味しており、ときにはイノベーションにとまらう esteem も意味していた。「現代の青年には、斃れたらそれまで、石に噛り付いても人のやうな独特の大事業を遂行して、世間の奴等と驚かしてやろうと云ふ大なる気力がない」(傍点引用者)という井上角五郎の言葉(「自己独特の大事業を経営せよ」成功、1910年4月)は、<功名的立身出世主義>のこのような側面をよく示している。日本の近代化の革新エネルギーのひとつの源泉は、このような<功名的立身出世主義>にあったのはなからうか。

〔図〕

↑
社会的地位
↓

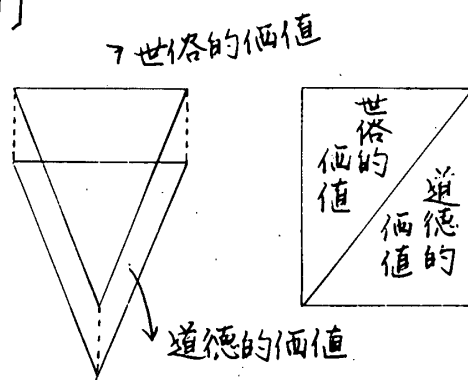


図 A

図 B